

ずいそう



犬と親しむ

阿部 裕

我家には、今年の11月に13才になる小犬が同居している。名前はチャムというパピヨンのメスである。

小供が、どうしても犬を飼いたいというので、当時、飼うことが禁じられていた団地で、ひそかに(?)育て始めたのがきっかけである。

息子と娘が気に入った生後数ヶ月の小犬を選んで手に入れた。全体が白色で部分的に黒い部分の混ざったパピヨンである。

性格はおとなしいと聞いていたが、すこぶる活発で、臆病な所もあり、特に鼻の形で言えばシーズ犬タイプの犬とは相性が悪く、散歩中でも身の程知らずに戦いを挑んで飼主をはらはらさせる。時には、興奮の余り飼主にもかみつく始末である。

最近は何のせいかわからない、すっかり目の回りも白くなり動きも鈍くなって来ている。食事は、朝夕2回、いわゆるドッグフードという食物を与えているが、体調によっては残すこともある。以前は、小生が飲んでどんなに夜遅く帰宅しても、ものの数秒で玄関に出迎えてくれたが、最近では、どこにいるのか家中シーンとして誰も出てこない。自分の健康を兼ねて、週末には散歩に連れて行くことにしている。特に道の端や、蚊の多い茂みを好んで鼻をくくんさせながら歩き回るので、夏などは蚊にさされて大変である。何の匂いを嗅いでいるのか良くわからないが、嗅覚の方は、依然、衰えている様子は見られない。散歩では、人間の思うにまかせない行動をする。いつも20~30分程で、無理やり家に連れて帰ることにしている。その内、1度位徹底的に相手がいやと言う程、散歩させたいと思ってはいるが。

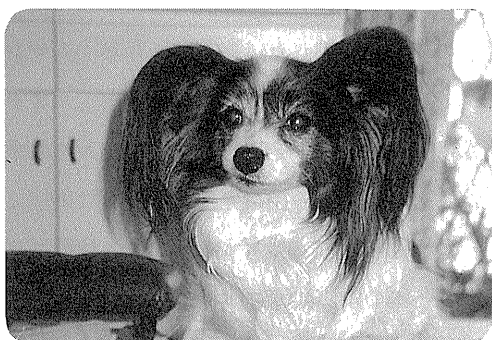
若い時は、綱をはなすとあっという間にいなくなってしまう家族総出で、近所を捜しまわった。もともと猟犬のせいかわからない足はめっぽう速い。特に、幼児には興味が強いらしく近付こうとす

るので引き止めるのに苦労したこともある。

始めの頃は、部屋の中の小屋に入れておいたが、女房と小供が布団の上で遊ばせてから、冬などは小生の布団の上や中に入って寝る習慣がついた。毛が抜けるので、しばらくは手厳しく拒否していたのだが、いつのまにか今では、寝返りを打つと背中にぶつかるように寝ていて、びっくりすることがある。それも、いびきをかきながらである。

年とともに、階段を登るのが大変らしく、夜中などに階下で泣き声がしているのを家族のものが聞きつけて2階に抱き上げて連れてくる。階段を降りる時も、たまに足をすべらせる物音が聞こえて、足が折れないかと心配させられる。このように、我家では家族の一員として生活しているが、人間と比べて感心するのは、少し位、体調が悪くてもじっと休んでいて2~3日もすると元気になる事である。薬もほとんど必要なく自己回復力で何とかなのである。これからも、子供の成長とともに我家で育った老人（ちょっと失礼だが）を大事にして暮らして行きたいと思っている。一度何を考えているのか聞いて見たいと思っているが、目を見ているだけで何やら通じ合うものがあるのが不思議である。

もっとも、漱石の「我が輩は猫である」ではないが、犬の方では、「人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、可笑しくもないことを笑ったり、面白くもないことを嬉しがったりする外に能もない者だと思った。……」などと人間の愚劣さを気の毒に思っているのかもしれないが……。



吾輩はチャムである

風の音に 目をさましたる 秋の夜

横なる犬に 布団かけたり